

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

埼玉の近代文化 2 : 児童文学における展開 佐藤紅 緑・壺井栄-

著者	河野 基樹
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	5
ページ	274(31)-261(44)
発行年	2005-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000966/



埼玉の近代文化 2

児童文学における展開 佐藤紅緑・壺井栄

河野基樹

1 児童文学に描かれてきた埼玉

埼玉児童文学とは、埼玉出身が在住・一時滞在した作家の、あるいは、埼玉を舞台とするか創作の重要なモメントとした作品と捉えられよう。本稿は、同県の出身ではないけれども、埼玉を舞台とする大衆児童文学を書いた佐藤紅緑、さらには戦中・戦後の埼玉の世相を作品に写し出した壺井栄、この二人の文業を考察する。本篇は、「埼玉の近代文化 児童文学における展開」右井桃子^(註1)の続編である。

2 佐藤紅緑「あゝ玉杯に花つけて」

2・1 少年小説作家としての紅緑

人間・佐藤紅緑は、彼への関心の持ち方の如何によって、さまざまな人間像を現出させる。新聞記者、脚本家、通俗作家、甚だしくは国士と捉える者もいる。しかし見落とせないのは、紅緑の晩年、一九二〇年代末から四〇年代に至る、少年・少女小説作家としての姿である。紅緑のこの期の代表作は「あゝ玉杯^{たまぐさ}に花つけて」。右作

品はしかし、単に文学史上において著名であるというだけでなく、紅緑と版元の大日本雄弁会講談社・野間清治との関わり、文化統制と検閲の実態、芸術的児童文学と大衆的児童文学の角逐、その後の大衆的児童文学の史的展開、それらを考える上で重要な作品なのである。

2・2 紅緑の来歴とその作品

紅緑は、一八七四年七月、青森県に生まれる。本名は、治六^{ちろく}。一九〇六年、「中央公論」掲載の「あん火」により文壇入りし、新派脚本「俠艶録」で通俗作家の道を歩み始めた。

「あゝ玉杯に花つけて」は、一七年五月から一年間にわたり、「少年倶楽部^{ねんくらぶ}」に連載。編集は加藤謙一。紅緑は当時傲岸をもって編集者から怖れられていた。少年小説執筆のこの依頼にも当初、「なにッ、このおれにハナ垂れっ子の読む小説を書けというのかッ」と凄んだ。加藤はこれに対し、「子どもは国の宝ですぞ、子どもがよくならなければ日本国はよくならない(のです)」と、心を摸る口上で応酬した。^(註2)

連載が始まると、「少年倶楽部」は、三〇万部から一挙に四五万部へと飛躍した。稿料は、何枚書いても一篇三百円。編集経費の半分に迫った。埼玉の浦和の町が作品舞台。物語は、貧しくて中等教育を受けられない「豆腐屋のチビ公」こと青木千三少年が、地元・浦和の人々に黙々先生と呼ばれる篠原浩蔵の夜学校に通い、「検定」で第一高等学校に合格するという筋立て。黙々先生は、「熊谷の豪族の子孫で」、「帝国大学初期の卒業者」、しかし故あって、自ら「官職を辞して浦和に帰臥」したという反骨在野の人物設定。

青木千三の父は、政治熱に取り憑かれ財産を蕩尽、早世した。千三は、母とともに伯父の覚平を頼り、その生業を手伝う。貧しい千三と裕福な親友・柳光一、生蕃こと酒井蔵の傲慢といじめられる千三、父親のいない千三と助役の子供、夜学・黙々塾と浦和中学、ライバル関係の中学校と師範学校、作品構造はこのように明瞭かつ図式的である。作品の一つの大きなクライマックスは、黙々塾と中学校との、いわば知恵と力比べである対抗野球試合の場



写真1 「あゝ玉杯に花うけて」の作品舞台・鹿島台
(写真中央は、旧制浦和中学校跡地に建つモニュメント。隣接の現・浦和市役所敷地には、かつて埼玉県師範学校があった。)

面。黙々塾は、中学生チームを破る。(＊写真1参照)

鳥越 信…昭和二年から始まった佐藤紅緑の代表作「あゝ玉杯に花うけて」の中に、中等野球の問題がはいっているわけですね。

西郷竹彦…あのころの青春というのは野球、スポーツね。

鳥越 信…あれには浦和中学が出てくるわけですよ。浦和中学というのは野球のほうの名門でね。その浦和中学に對抗して黙々塾という主人公の少年が行っている私設の野球チームが対等に試合をする。そこに精神教育の夢を見いだしているわけです。(佐藤紅緑と『少年倶楽部』^(註3))

私塾が「名門」校を破るこの場面は、少年読者にとって、胸おどる作品部分であった。

2・3 紅緑と野間清治

2・3・1 立身・出世の階段

「あゝ玉杯に花うけて」の創作において、紅緑自身は何を意図・指向していたのか。紅緑に「私の小説について」という文章がある。

私は「あゝ玉杯に花うけて」において諸君の前に提供した問題はやはり友情と義侠と師弟の愛でした、特に私は今日の学生に最も欠けて居るものは、師に対する礼儀のない事。艱苦^{かんく}に耐ゆる力のない事、卑劣な娯楽に耽る事、この三つだと思っています^(註4)。

しかし、紅緑がいかに熱心にこのように説くとも、少年読者は、貧困にめげず上級学校へ進学する、という作品部分にこそ、惹き付

けられたのではなかったか。

鳥越 信…佐藤紅緑の少年小説には、たいてい志をいだいて向学心に燃えるけなげな少年が出てくるんですが、その家庭環境がみな貧しい。その貧困にもめげず、向学心を持って目的に進んだというのが、一口にいって彼の物語ですね。（佐藤紅緑と『少年倶楽部』^{（註5）}）

少年たちには実は、「友情と義侠と師弟愛」のお説教よりも切実な悩み事があったのだ。登場人物・千三と同じように、自分には進学の夢が果せないという身の上についてである。紅緑作品への深い自己投影と、強い共感、そこに生まれたのではないか。

西郷竹彦…師範（は）学費免除、卒業すると就職はきまっていた、中学、高校、大学と上へ行く人間……これは家庭のいいところ、頭はいいけど貧乏なというのは師範学校とか、戦争になってから（は）軍関係の学校（佐藤紅緑と『少年倶楽部』^{（註6）}）

佐藤忠男は、「佐藤紅緑論」の中で、この問題をより直截に、「佐藤紅緑の少年小説は、一口に言ってしまうば立身出世主義の教訓小説である」という言葉で述べている。「少年倶楽部」の誌面には、編集部により、次のような文面が掲げられた。

『あゝ玉杯に花つけて』 本誌五月号より連載 文壇

の大家佐藤紅緑先生が、前途ある天下の少年に対する、燃ゆるような熱情から、心血をそそいで執筆された一代の大傑作！少年という少年が、一読発奮、終生忘れることの出来ないような強い感動をのこすもの、曾て見ることの出来なかった大立志小説、希望に向かって進まる少年諸君の道程をてらす光明とし

て熟読すべきはこれである。^{（註8）}

この「満天下の少年が熟読すべき立志小説」の連載に関して、編集部はさらに、「玉杯」に対する読者の感激」という囲み記事を設け、「佐藤紅緑先生が少年諸君の為に御執筆下さるこの「あゝ玉杯に花つけて」に就いては愛読者諸君から熱烈な賛嘆の手紙が寄せられます」と自賛した上で、次のような読者の感想文を誌面に掲載している。

「あゝ玉杯」を読んだ時は思わず胸を躍らしました。都合で中学へゆけない私等の無二の友達です。私はきっと、勉強して中学の者に負けまいと決心しました。（横浜市 東福寺武）

貧に泣き、失望も起こし、苦しみをもして、希望を起こし、感謝して一心勉強する心、読者自ら奮起する、僕には心の薬であります。（大分県日田町 宇野義雄）

対抗試合に勝つとは、進学を断念した少年、多くは「少年倶楽部」の廻し読みの読者でもあるそうした少年たちにとって、上級学校へ当たり前のように入学する少年たちへ一矢を報いる、ということであつたろう。強靱な社会構造を前に、負け続けることを宿命づけられている下積み少年たちにとって、千三の立身は、己が身にカタルシスを感じさせる事柄であつた。逆説的に言えば、下積み少年たちのそのような感受性に、巧みにこの作品は入り込んでいった、と言つてもよからう。作家・編集者・出版業者は三者共同で、教育の機会を奪われ、立身の望みを絶たれた少年たちを感溺させる独特のフィクションを、プロデュースしたのである。

さらにここで強調しておきたいのは、この三者、紅緑・加藤謙一・野間清治の三人がいずれも、学歴と立身との関係をこれまで繰り返

し身に沁みて感じてきたであろうことである。彼らにはもとも共通の強い紐帯があったことになる。「玉杯」の物語内容は、多かれ少なかれ、この三人にこれまで降り掛かったであろう学歴上の蹉跌と重なり合っている。

紅緑は少年時代より、学校を転々とし、東奥義塾に二年、青森尋常中学に四年、上京し、陸羯南^{くがつなん}の書生になってからも、法学院、国学院などに学ぶが、中途退学することは変わらず、最終学歴は結局は尋常小学校であった。加藤謙一も、師範(二部)の出身であるが、小学校教師では自持が許さなかったのか、「教員をやめて郷里を出て来た」ものの、事志と違つてまごまごしていたのを野間社長に拾われた(という)いきさつ^(註10)を語るのを常としていた。野間自身も、高等小学校卒業、師範学校入学、僥倖に恵まれての養成所入所、中学校教員から県視学へという経歴を辿るが、この道程は野間にとつて、学歴差別社会において味あわされた仕打ちを屈託として胸に刻んだまま、身を切り血を吹き出させながら一段一段登つて行く、立身出世の階段であった。

2・3・2 もう一つの 野間清治伝

野間は、『体験を語る』『処世の道』『出世の礎』『修養雑話』『栄えゆく道』『野間清治短話集』『世間雑話』など、数多くの「ハウツー本」を残した。これらの本は、読者の立身出世には結局なんら役立たなかつたであろうが、野間自身の経歴と立身出世に賭ける心情については、それを鮮やかに示してみせることになっている。野間は、自社の出版物に、右書籍の広告を掲載することを好んだ。『体験を語る』の出版に際しては、次のような内容広告が打たれた。^(註11) 中等

学校へ入らなくとも偉くなれる(苦勞・より強く・リンカーン・その一日・貴ぶべき実学^(註11))。同書の巻頭には、「中等学校へ入らなくとも偉くなれる」という章段が設けられ、「小学校を卒業しただけで、必ずしも中等学校に入らなくとも、偉くなることは出来るものである。偉くなることの出来る人は、進んで中等学校に入つても入らなくとも偉くなるものである。入ると入らぬとは左程の問題ではない」と麗々しく論じられる。^(註12)

『野間清治伝』を紐解きたい。「この一家は財政的に言へば貧乏であつた。しかし精神的に言へば非常に富裕であつた。野間清治は富める家庭に教育せらるゝの幸福を恵まれた少年であつた」。「明治二十九年四月六日、十九歳の春、野間清治は群馬県尋常師範学校に入学」。「三十三年三月三十一日、この異彩を放てる一生徒は、無事に師範学校を卒業したのであつた」。「明治三十五年一月十五日には実業補習学校規定が改正せられ、文部大臣はこれに就いて訓令を出した。二月六日には中学校教授要目が定められた。同十七日には地方学事通則中若干の改正が行はれた。三月二十九日には臨時教員養成所規定が定められた」。中等教員の絶対数不足の解消を目的に、この臨時教育養成所が全国に六箇所設置された。「山村の一青年教師野間清治」も、またこの時代の大浪の飛沫を浴びて起ち上つた。それは大きな天の配剤であるかのやうに思へる。世には、仮に如何なる文彩が施されようと、事実そのものが語る事柄というものがある。右は、その好例であらう。

養成所卒業後、野間は給与条件の良かった沖繩に赴任、間もなく県視学^(註14) 旧制の地方教育行政官 に「栄転」する。『私の半生』に次のようにある。

（沖縄県庁）学務課の諸君が、私を県視学に推薦してくれた理由の一つは、私の性格がこの方面に向いているということもあつたであろうが、なおほかに、こんな理由もあつた。それは

中学と師範との反目で、生徒も教師も一緒になつて、たがいに敵視するという不愉快な傾向を、私によつて緩和させたいためであつたらしい。私の群馬師範時代にも、中学の生徒が、師範の生徒を「^{ひん}子子」とか「^{ひん}寄生虫」とかいつたのを憤慨して、ずいぶん大喧嘩をして問題になつたことがあつた。私が、師範の卒業生であること、そして中学の教師であること、しかも師範の教師といたつて仲よくつきあつてゐること、それらこれらを考へて、両者の間の険悪な空気も、野間によつてよほど和らげ得るであらう、ぜひそうさせたいものだといふような意図もあつたらしい。

「あゝ玉杯に花つけて」に、右と全く同じく、旧制中学校の生徒と師範学校生との喧嘩の場面があつたことが想起される。紅緑は、野間と語らい合つ中で、野間が中学校・師範学校いずれもの校風を知悉し、両者の確執についても詳しいことを知り、その経歴を少年小説の形に仮託して、新たなもう一つの《野間清治伝》を書いたのではなかつたか。小説「あゝ玉杯に花つけて」は、それを仔細に見るならば、野間個人史の物語化として読み替へることのできる要素を数多く持ち合わせているのである。

2・4 立身・出世の「講談」

「少年倶楽部」文化の関係者の人性、さらに彼らの「作品」や「回顧録」を繙く時、立身や功名に拘つて、大衆の素朴な心の琴線を捉

え、涙を絞らせる体の「講談」に見紛うものが多いことに気づく。佐藤愛子は父親・紅緑を次のように見た。

野間清治はこういつた。「講談社は国土として紅緑を遇すべし」。通俗道徳を啓蒙しようとしてゐる野間清治と紅緑は、お互いに感激家である点で互いに惹き合つたものがあつた。「野間清治は偉人だ。世間は彼の真価を知らん。あの男の真の値打ちを知つてゐるのは俺ひとりだろつ」、紅緑はそういつた。彼は野間清治への友情のために講談社以外の雑誌の仕事は一切引き受けなかつた。（『花はくれない』佐藤愛子^{（註15）}）

紅緑も野間も、「義侠を重んずる」ことを以つて自らを半ば任じていたのであろう。実情はしかし、砂田弘が言つように次の如くではなかつたか。

野間清治の^{いんげん}懇勤な招聘と紅緑自身の文学的な行詰りがその主な理由だつたと考えられる。「修養雑誌」の著者である野間清治が義侠と人情の世界を描くに巧みであつた紅緑に感心を寄せたであろうことは考えやすいところだし、事実、人間修養を標榜する「少年倶楽部」にとつて紅緑は恰好な作家であつた。^{（註16）}

「義侠」「国民性の啓蒙」そして「人格の涵養」などといった言葉は何時も、それが持ち出されるに都合が良い時に、そう思つた人間によつて持ち出される言葉なのである。

2・5 文化統制と検閲

思想転向の時代を迎へ、紅緑はマスコミからの退場を余儀なくされていつた。紅緑と講談社との絶縁は、一九四〇年。自筆年譜に「少年倶楽部不遜なるを以て同誌と絶つ」とある。編集者の無作法が

原因とされる。しかし、より直接的原因は、原稿の書き直しを依頼されたことにあった。「作品のマンネリ化を指摘され、はじめて書き直しを命じられた紅緑は、自尊心を傷つけられて激怒し、筆を折ったのである」^(註17)。しかし、決定的理由は、後ろ盾であった盟友・野間の急逝(三八年)ではなからうか。時代は移ろいつつあった。

新体制、革新官僚、総力戦の時代へと進み行くなかで、その存在が国士や思想浪人のように世に見做されていたとするならば、紅緑の言動は自ずから、古色蒼然たる迂遠なものに見えるようになって来たに相違ない。同じ「忠孝」の宣教であつても、紅緑のそれは大時代的な趣きで、時の少国民の思想を涵養するには、もはや不適当であつた。

折りから内務省の統制は、児童文学にも掛けられ始めていた。三八年四月、内務省警保局図書課は調査に着手、民間の児童文化関係者に、統制を目的とする「幼少年雑誌改善に関する答申案」の提出を依頼、それぞれの答申案から、摘出構成した「児童読物改善二關スル」警保局図書課案を作成、一〇月二五日、「廃止すべき事項ソノ他」を決定、「要綱」として示した。以下、摘録する。

「廃止スベキ事項」一、活字(二)振仮名ノ使用

一、内容の野卑、陰惨、猥奇的ニ渉ル読物

「編集上ノ注意事項」

一、教訓的タラズシテ教育的タルコト^(註18)

編集当事者にとってこの「要綱」は、自社の「倶楽部」雑誌を名指ししての統制、という意識で受けとめられた。

記事統制の第一波は、この(三八)年十月二十六日、まず児童雑誌に発せられた。内務省が行なった児童読物の浄化運動で、

内容は次のような提示事項であるが、これがわが国における、最初の少国民文化統制であつた。社の出版物としては、「少年倶楽部」「少女倶楽部」「幼年倶楽部」の各誌が該当した。^(註19)特に紅緑作品は、いわば「教訓的タラザルナシ」がその最大の特徴である。当時、大日本雄弁会講談社の編集者であつた西村俊成は、次のように語る。

振仮名の問題では、われわれもずいぶん闘つた。佐藤紅緑先生なんか「内務省の小役人何をいうか。振仮名があつてこそむつかしい文字も覚え、言葉も覚えるのだ」と、憤慨された。^(註20)

「少年倶楽部」の編集方針の転換と、その誌面への反映を前にして、「軍国主義謳歌に、紅緑も、彼なりにおもねようとしたあとは見られる」。しかし、紅緑作品の特徴は、十年一律に「貧しい少年の立身奮闘」にあつた。「紅緑は体制維持の作家ではあつたが、この時代に多く見られたような、臆面もなく、体制に便乗するような節操のない作家ではなかつたのである」。^(註21)

紅緑は相変わらず義侠と人情の世界を描くことに固執していた

ということ、つまり近代社会の成立に伴う近代思想の浸透に紅

緑が気づかなかつたということは重大(「少年少女小説の位置」

砂田弘)^(註22)

総力戦の時代に、また 近代の超克 が取り沙汰されるなか、紅緑の前近代の様相は、同時代性を逸していったと言えようか。

2・6 芸術的児童文学と大衆的児童文学

一九六〇年を前後して、児童文学界には、幾つかの理論闘争が持ち上がった。その一つに、少年小説の日本児童文学史への位置付け

に関するものがあつた。論争は主に、佐藤紅緑と「あゝ玉杯に花つけて」の評価を巡って行われた。戦後期にあつて、論争が起るまでは、「あゝ玉杯に花つけて」を含め紅緑作品は概ね、「通俗の一語で黙殺されがちだつた」^(註23)。佐藤忠男はこの現状に異を唱え、「少年の理想主義について」^(註24)（五九年三月）において、当時の少年の精神形成に重要な役割を果たしたことを再評価する動きに出たのである。右の主張に対しては、当然、反批判が出た。山中恒・山本明の「佐藤忠男少年の理想主義について」^(註25)がそれである。

佐藤が言うように、少年たちが要求したものは、少年のイメージを刺戟し、知識欲を満足させる作品であり、戦前においては、小川未明、浜田広介、坪田譲治に代表される、いわゆる芸術的児童文学よりも、『少年倶楽部』の読物の方が、ずっと大きな役割を果たしたのである。そのことを、まず確認しておいた上でのことであるが、少年たちの望んだもの、つまり豊かなイメージと知識のパンに対して、少年軍事愛国小説は、石を与えたと言えるのではなからうか。^(註26)

2・7 大衆的児童文学をめぐる論争史

佐藤忠男論の理論的光背は、鶴見俊輔「大衆小説に関する思い出」^(註27)（一九四九年）にある。

子供のころ、大衆小説ばかり読みふけてしかられ（たが）、教科書よりも、大衆小説の方が、心に残っている。大衆小説によつて心を養われるということは、その頃のぼく（鶴見）の友人達の間では、珍しくなかつた。たしかに、大衆小説というのは、哲学性の濃厚な芸術である。日本の純文芸と比較して考

える時、日本の大衆小説は、より多く「人間いかに生きべきか」の問題と取りくんできたといえるし、その意味で、純文芸よりも多分に哲学的なのである。^(註28)

鶴見の「大衆小説」の語を、「大衆児童文学」に置換すれば、そのまま佐藤説になる。文芸の「芸術性」「大衆性」の弁別を試みようとするならば、むろんこのような論議は当然生じてこよう。しかしそこには本来、より重要な別の問題が伏在してはいなかつたか。

（子供の）「内的要求」をみたしてくれた諸要素を佐藤氏は指摘してくれたが、その諸要素が実は権力者のイデオロギー注入の手段として活用されていた点を、故意にか偶然にか、佐藤氏は見落としているのだ。「少年倶楽部」は、私たちをして軍国少年へと駆りたてた当時の国家政策、国家体制の一翼をになつたものであつた。「イデオロギーの善悪はともかく」と、佐藤氏はいうが、これは驚くべき敗北思想であり、そうした考え方こそ「はつきりと欺瞞的」である（「大衆的児童文学」鳥越信）^(註29)

鳥越の右の提起はその後、充分に討議されることはなかつた。一方、佐藤忠男はその後、「俗悪児童文学」を弁護する『月光仮面』追放を叫ぶザアマス族の偽善性批判^(註30)、などにおいて、同じ主旨の発言を繰り返した。片岡並男「佐藤忠男氏の俗悪児童文学を弁護する論を批判する」^(註31)は、右に対する反批判。

又、右から派生する論争が展開された。それが、上笙一郎・加太こうじ『児童文学への招待』（南北社六五年）の刊行をきっかけとする、第二の「大衆的児童文学論争」である。論文名のみを以下に記す。大藤幹夫「上・加太理論を批判する」^(註32)（六六年四月）。上笙一郎「大藤批判を批判する」^(註33)（六六年四月）。大藤幹夫「再び「大衆的

児童文学について^(註32)（六六年八月）。加太こうじ「児童文学大衆化論序説 大藤論文に事よせて」^(註33)（六六年一月）。

大衆的児童文学論争 史上に生じた諸課題は、解決がいまだ継続の懸案事項となっている。この論争は他の文学論争と同様に、生産的なものとはいえない難かった。そこには、弁証法的に論議を深めるという歴史の不在、またその能力のもととの欠如といった日本の思想・思索の隘路がまたも顔を見せている。「大衆」の原像を巡るこの論争はしかし、芸術大衆化論争、横光利一の提唱した「純粹小説論」（三五年）、鶴見俊輔「限界芸術」論 「純粹芸術」（Pure Art）、「大衆芸術（Popular Art）」、「限界芸術（Marginal Art）」の構想・理念、サブ・カルチャー論などと垣根越しの、重大な思想的課題を内包しているのだ。

3 壺井栄と埼玉

3・1 壺井栄の来歴

壺井栄は、一八九九年八月五日、香川県小豆郡坂手村（現 内海町坂手）に、岩井藤吉・アサの五女として生まれた。父・藤吉は、小豆島の特産・醤油を入れる樽職人。母・アサは、十人に及ぶ実子を養育した上、親と死別した放浪の孤児二人を引き取って育てた。職掌柄、いつも数人の職人を抱え、家には二十人前後が同居することになった。血の繋がりが、それだけには信を置かぬ、共に生きる中で育つ心の結びつき、両親の生き方は、後の栄の人生に大きな影響を与えることになった。

一九二五年に上京、壺井繁治と結婚。子の無かった栄は、上京後も、妹や妹の子供を、実子のように愛した。二五年、妹（六女・ス

工）の遺児・真澄を引き取った。二六年、妹二人（シン・貞枝）を東京に引き取り、上級学校へ通わせた。四五年、長兄の孫・右文をその両親の早世を理由に引き取る。悠揚迫らざる栄のこの態度は、確かに母親から引き継がれたものであった。

栄は末の妹・貞枝を溺愛した。その初期作品の多くは、貞枝一家をモデルとする。貞枝は、結婚後、小豆島在であったが、長女・発代には眼の障害があった。良い医療を求めて奮闘する貞枝の姿を描いた「大根の葉」が栄の出世作。栄は励ましの便りを送り、貞枝からは、長女・発代、そして発代の兄の長男・研造の日常を記した返信があつた。折りから、この三〇年代の半ば、夫・繁治は度々検挙・投獄されていた。革命運動犠牲者救援会（モップル）の活動を通じて、栄は、宮本百合子・佐多稲子と知り合った。三六年頃、窪川（佐多）稲子に、妹一家の日々の模様を語って聞かせたところ、それをそのまま書けば、小説になると勧められる。「大根の葉」を執筆。宮本百合子の推薦があつて、三八年九月、改造社の「文芸」に掲載される。栄はこの時、四十一歳。遅い文壇デビューであつた。

栄はこれ以降、自身の甥・研造と姪・発代を、「健」と「克子」の物語として、創作の中でもその成長を見守った。四〇年、貞枝に、発代と同病の男児が生まれるが早世。この次男・光多、後に生まれた三男・直吉を加え四人の子は、「大根の葉」以後、作品「風車」、「赤いステッキ」、「窓」、「霧の街」、「眼鏡」において、さらには「めがね」、「おべんとつ」、「雪の記憶」の諸作で、さまざまに描かれた貞枝と、その夫・戒居仁平治、甥や姪を描くそれら物語は、多くが埼玉県熊谷市を舞台とする。栄作品の舞台として折々現われる熊谷市は、貞枝の夫の赴任先であつた。

3・2 栄文学と埼玉

3・2・1 栄作品の 埼玉もの

栄文学は、「二十四の瞳」（一九五二年）を以って知られるように、その舞台であった小豆島の印象によって大きく規定されている。しかし一方で、埼玉の地が、しばしば選ばれ、描かれていることは、いまだあまり知られていない。栄文学の中に 埼玉もの の領域を指定したい。さらに三つに分節する。一つは、熊谷の妹家族もの、二つ目は、戦時国策もの、三つには、戦後の長篇作品「母のない子と子のない母と」。

3・2・2 熊谷の妹家族もの

「こかぼつ^{（註35）}の縁」（一九六一年）から摘録する。

埼玉県熊谷市^{（註36）}の名物菓子に「こかぼつ」というのがある。私の妹が、それまでいた越後の高田からこかぼつの熊谷に移り住むことになった。目の悪い子供を生んで悲嘆にくれながら、一生けんめいになっていた妹（貞枝）は、東京にいる時も、高田へ移ってから（宮本）百合子さんから慰めやばましの言葉や手紙をもらっていたそうで、熊谷へ移るとすぐ、こかぼつをたくさんもって（百合子を訪問するために）東京へやってきた。

貞枝の夫・戎居仁平治はこれ以前、家族を小豆島に置いて単身上京、不遇を困っていたが、新潟によつやく職を得た。貞枝夫妻のその後の熊谷移住については、壺井繁治が書いている。

わたしの甥の戎居仁平治が新潟県高田から熊谷へ移り、土地の農学校の英語教師になったのは、前年（四〇年）の九月ごろだった。わたしの甥の妻は、栄の妹であり、当時この夫婦の間

に、現在建築家となつてゐる長男の研造と、いま熊谷でピアノ教室を開いてゐる妹の発代、それから次男の光多の三人の子供があつた。^{（註37）}

戎居仁平治は、一九〇九年、香川県小豆郡苗羽村^{（註38）}（現 内海町）堀越に生まれる。父・仁一、母・リエ。リエは、壺井繁治の姉。三年、岩井貞枝（栄妹）と結婚。同年、思想活動を理由に検挙。三年、新潟県立高田中学校の英語教師として赴任。四〇年、埼玉県立熊谷農学校に転任。四三年、教職追放を受ける。五〇年、埼玉県西熊谷病院に勤務。後に、関連施設・羽生園の園長となり定年まで勤務。病院の様子は、栄作品「紙一重^{（註39）}」（五三年）に描かれる。九三年、永眠。長男・研治は、三三年九月、小豆島の生まれ。発代は、三五年三月に小豆島で、光多は、四〇年五月に新潟で生まれる。

戎居研造は、「父のこと栄のことそして繁治のこと^{（註40）}」において、「父についての最初の記憶は私の胸底に錘となつて沈んでいる。父の姿は見えないのだ」、「時折戸口に立つ巡查が、母に尋ねること云えはどうやら父のことだし、大人たちの話声が父の動静については急に小声になるのだった。父が今にもまた訪ねてくる期待と、何かが起る怖れとで身を固くした」と書く。幼時の記憶である。思想犯としての保護観察が、あるいはそれに準ずる扱いであろう。仁平治は、これがために、職を求めて全国を転々としなければならなかった。担当科目が、「敵性語」の英語であつたことがさらなる不利益を招いた。

妹一家との交流を描く作品をさらに幾つか以下に挙げたい。「縁起^{（註41）}」（四六年）に、「うちに飼つてゐた鶏は終戦直後熊谷から貰われてきた戦災孤児の鶏だった。八月十四日に最後の爆撃をつけた熊谷

で、一しよに飼われていた他の鶏たちは悲惨な運命を辿り、この一羽だけが無事で私の家へ貰われてきたのだった」とある。両家族の頻繁な往来にしたがって、次のような物品も行き来した。掌篇「モルトゲ」^(註39)。「熊谷市に住んでいる妹から、鯉を買ったからお正月にはそれを持って上京するという便りを貰った。私は鯉にモルトゲという名をつけた。それは今、都新聞に出ている坪田譲治氏の小説に出てくる鯉の名を借りたのである」。もう一つ、「小熊座」^(註40)から引く。「小熊座は埼玉県熊谷市にある。座主は十歳になる私の甥で、出来たのはついこの三月なのに、日と共に発展していると、最近の便りであった。言つまでもなく紙芝居である。この舞台は吉屋信子さんから頂いた。小熊座は、熊谷市の熊をとって、私たち夫婦が命名したものである」。

3・2・3 戦時国策もの

栄文学には、埼玉を舞台に、戦時国策 に関係する文章がある。『壺井栄全集』に未収録の随筆「田植えの日」に着目したい。右は、一九四三年七月九日、一〇日、一一日付けの「東京新聞」に連載された。同文章によれば、栄は、「文学報国会主催の錬成講座」、「田植作業に参加するため」に、「(埼玉県)北足立郡鴻巣町農林省農事試験場鴻巣試験地」を訪問した。「錬成講座の趣旨」は、「聖戦下食料増産に邁進する農業戦士の労苦を味ひ、その真姿を把握し創作の糧とする」というもの。栄はこの経験を、「自然と偶然を相手に永年農作物の研究に携はる人間の研究態度を語る態度の中に、不可能を可能にするとか、可能を不可能に終らしめない、といふ言葉が深い感銘をもつて私の心に残つてゐる」と総括する。当該試験場の当時

の業務は、単に農事研究に留まらない。栄が加わった文報活動は、この時期における試験場の次のような社会的役割と表裏をなすものであったと言えよう。その役割とは、同時期に掲載された新聞の以下の見出しに明らかである。

「鴻巣に学ぶ『中国の鋤の尖兵』」(「読売新聞」埼玉版 四一年一月二六日) / 「行脚する鋤の尖兵 十八日鴻巣試験地を見学」(「読売新聞」埼玉版 四一年一月一四日) / 「行脚する鋤の尖兵 鴻巣試験地に学ぶ」(「読売新聞」埼玉版 四一年一月九日) / 「鴻巣に日輪兵舎」(「読売新聞」埼玉版 四二年六月二六日)

「日輪兵舎」とは、満蒙開拓青少年義勇軍准幹部生を教育するための技術訓練道場のこと。戦時国策 への栄の関わりについて、同時期の類例を補足的に挙げておく。「農村訪問記」^(註41)(四一年)。当時、食料増産に欠かせぬものとして、篤農家を顕彰することが盛んであった。「訪問」を終えて、栄は、「農業報国の実を挙げ」られていたことを称えている。又、要請を受けて、出征兵士の家を訪ねることもあった。「日本の母」^(註42)(一)(四二年)。息子を何人も、志願兵として戦場へ送ったいわば「愛国の母」を訪問し、その感想を次のように語る。「片親で育ててきた(この「日本の母」)の苦勞に酬ゆるものが、たとえ「靖国」の標牌であろうとも、彼女はそれをすでに覚悟した上でこの落ちついた日々を送っているのである。やがては又、棚田家の三尺の戸口の上に「忠勇」の札が一枚殖えることであろう」。「日本の母」^(註43)(二)も、「軍国の母」を訪ねた折の同趣旨の文章。ルポルタージュは戦後も書かれた。「飢餓の街」^(註44)(四六年)は、闇物資買出しの体験レポート。埼玉県各地を巡った。「私は約一時間

を池袋駅のフォームに立ち、それから寄居行の電車にのった。熊谷で一泊した私は、汽車で東京へ帰った。

3・2・4 「母のない子と子のない母」

(註45)

一九五一年一月、『母のない子と子のない母』が刊行された。終戦の年に徴兵され、ソヴィエト・ロシアでの抑留が取り沙汰されている捨男という人物と、熊谷に残された家族の物語。捨男を待つのは、「かぞえ年十一になる一郎と、三つの四郎と、そしておかあさん」。作中に、「熊谷で戦災にあった捨男さん一家は、おとうさんが帰るまでは熊谷でまとうとがんばっていました」とある。右にいう「戦災」とは、四五年八月一四日午後一時半から一五日未明にかけての熊谷大空襲のこと。この空襲による罹災者は、市全人口の二八パーセント、一万五三九〇人、死者は二六六人。母子は、夫の姻戚を頼って小豆島へ渡る。しかし、一郎は、「（小豆島へ）かえってきたその日から、口には出しませんが、熊谷をおもって後悔した。一郎の、熊谷への郷愁が度々語られる。

さらには、作中の一郎の次の言も見逃し得ない。「熊谷のね、少しはなれた鴻巣というところにある、農事試験場のことを、いま思いだしてたんだよ。そこにいるばくのおとうさんの友だちの大場さんて人のこと」。鴻巣試験場は、東京・西ヶ原の試験場が手狭になったことから開設された。遡って、「東京日日新聞」の埼玉版に次のような見出しがある。

「農事試験場が鴻巣へ決まる迄地主は自重せよと間瀬農事試験場長語る」(「東京日日新聞」埼玉版 一九五三年七月四日) / 「国立農事試験場地愈々買収交渉」(「東京日日新聞」埼玉版

同年七月五日) / 「国立農事試験場試験場を鴻巣へ移転決定」(「東京日日新聞」埼玉版 同年七月六日)

一郎は、「農事試験場の鴻巣から植物図鑑をおくられたりしたこと、農学校志望はなかなか消すことができない」くなっている。そして、「大きくなられたらおとうさんのいた農学校へいって、大場さんのように農林技師になるつもり」でいるのだ。

鴻巣の描写を巡って、三三年初夏、文報・錬成講座での栄の経験が、同作にそのまま活かされている。さらに、戒居仁平治が戦時中に、政治信条を理由に受けた扱いも、同作品にその反映がみられる。作中で栄は、捨男に次のように語らせているのである。「おまえ（長男・一郎）はまだ小さかったから知らずにいたろうが、熊谷でおとうさんは農学校をやめさせられたんだよ。ほんとうはそうなんだよ。戦争ちゅう、英語なんて敵国語は必要でないという、むちゃくちゃな理由でね」。

4 未来の埼玉児童文学

埼玉の近代文化の一翼を担う埼玉児童文学の歴史について、二回に亘り論究した。埼玉の児童文化・児童文学の未来を指定する上でも、ここまでに言及したものに加え、埼玉・川口市の地場産業と青少年を描いた「キューポラのある街」(一九六一年)の作者・早船ちよ、さらには、「チョコレート戦争」(一九六五年)、「教室二〇五号」(一九六九年)の作者で、「おしゃれさん」(七六年)によって、「赤い鳥」以来の「日本童心主義」をパラダイム・シフトし、児童観の更新を試みた和光市出身の大石真など、考察の必要な児童文学者や作品が残されている。埼玉児童文学史の構築、またその学問領域の

確立のために、さらなる各論が必要とされる所以である。

【註】

- (1) 『埼玉の近代文化 児童文学における展開・石井桃子』、河野基樹「埼玉学園大学紀要」人間学部篇 第四号 二〇〇四年二月
- (2) 「玉杯」覚え書き 加藤謙一『佐藤紅緑全集』下巻 少年倶楽部名作講談社 一九六七年二月 所収
- (3) 『子どもの本の百年史』尾崎秀樹・西郷竹彦・鳥越信・宗武朝子 共著 明治図書出版 一九七三年一〇月
- (4) 『私の小説について』佐藤紅緑『少年倶楽部』一九二八年二月号 大日本雄弁会講談社
- (5) 『子どもの本の百年史』尾崎秀樹・西郷竹彦・鳥越信・宗武朝子 共著 明治図書出版 一九七三年一〇月
- (6) 『子どもの本の百年史』尾崎秀樹・西郷竹彦・鳥越信・宗武朝子 共著 明治図書出版 一九七三年一〇月
- (7) 『佐藤紅緑論』佐藤忠男『佐藤紅緑全集』上巻 少年倶楽部名作講談社 一九六七年二月 所収
- (8) 『少年倶楽部』一九二七年四月号 大日本雄弁会講談社
- (9) 『少年倶楽部』一九二七年四月号 大日本雄弁会講談社
- (10) 『少年倶楽部時代』加藤謙一 講談社 一九六八年九月
- (11) 『処世の道』野間清治 大日本雄弁会講談社 一九三〇年九月 同書に所収の広告文
- (12) 『体験を語る』野間清治 大日本雄弁会講談社 一九三〇年六月
- (13) 『野間清治伝』中村孝也 野間清治伝記編纂会 一九三四年一〇月
- (14) 『私の半生』野間清治 千倉書房 一九三六年七月
- (15) 『花はくれない小説佐藤紅緑』佐藤愛子 講談社 一九六七年二月
- (16) 『少年少女小説の位置』佐藤紅緑試論、砂田弘『日本児童文学』一九五九年七・八合併号
- (17) 『紅緑に筆を折らしたもの』砂田弘『日本児童文学』一九七一年二月号
- (18) 『児童読物改善二関スル指示要綱』内務省警保局図書課 一九三八年一〇月
- (19) 『講談社の歩んだ五十年』昭和編 社史編纂委員会 講談社 一九五九年一〇月
- (20) 『講談社の歩んだ五十年』昭和編 社史編纂委員会 講談社 一九五九年一〇月
- (21) 『紅緑に筆を折らしたもの』砂田弘『日本児童文学』一九七一年二月号
- (22) 『少年少女小説の位置』佐藤紅緑試論、砂田弘『日本児童文学』一九五九年七・八合併号
- (23) 『少年少女小説の位置』佐藤紅緑試論、砂田弘『日本児童文学』一九五九年七・八合併号
- (24) 『少年の理想主義について』『少年倶楽部』の再評価、佐藤忠男(資料収集 虫明亜呂無)『思想の科学』一九五九年三月号
- (25) 『一五年戦争下の少年軍事愛国小説』『勝ち抜く僕ら少国民 少年軍事愛国小説の世界』山中恒・山本明編 世界思想社 一九八五年三月
- (26) 『大衆小説に関する思い出』鶴見俊輔『女性改造』一九四九年二月号
- (27) 『大衆的児童文学』佐藤忠男氏批判、鳥越信『児童文学への招待』くろしお出版 一九六四年五月
- (28) 『「偽善性批判」を弁護する』『月光仮面』追放を叫ぶザアマス族の偽善性批判、佐藤忠男『婦人公論』一九五九年五月号
- (29) 『佐藤忠男氏の偽善性児童文学を弁護する論を批判する』片岡並男『日本児童文学』一九五九年七・八合併号

- (30) 「上・加太理論を批判する」 大藤幹夫 「日本児童文学」 一九六六年四月号
- (31) 「大藤批判を批判する」 上笙一郎 「日本児童文学」 一九六六年四月号
- (32) 「再び」大衆的「児童文学について」 大藤幹夫 「日本児童文学」 一九六六年八月号
- (33) 「児童文学大衆化論序説」 大藤論文に事よせて 「加太こうじ」 「日本児童文学」 一九六六年十一月号
- (34) 「こかぼうの縁」 壺井栄 「多喜二と百合子」 一九六一年三月号 多喜二・百合子研究会
- (35) 「激流の魚」 壺井繁治自伝『壺井繁治 立風書房 一九七四年四月』
- (36) 「紙一重」 壺井栄 「中央公論」 秋季増刊文芸特集号 一九五三年一〇月号
- (37) 「父のこと栄のことそして繁治のこと」 戎居研造 『壺井栄伝』 戎居仁平治 壺井栄文学館 一九九五年一月 所収
- (38) 「縁起」 壺井栄 「小天地」 一九四六年八月号 平凡社
- (39) 「モルトゲ」 壺井栄 初出未詳 『小熊座』 三杏書院 一九四三年一〇月
- (40) 「小熊座」 壺井栄 初出未詳 『小熊座』 三杏書院 一九四三年一〇月
- (41) 「農村訪問記」 壺井栄 「主婦之友」 一九四一年一月号
- (42) 「日本の母（一）」 壺井栄 「読売報知」 一九四二年一〇月二日 『日本の母』 日本文学報国会 編 春陽堂 一九四三年四月
- (43) 「日本の母（二）」 壺井栄 『小熊座』 三杏書院 一九四三年一〇月
- (44) 「飢餓の街」 壺井栄 「中央公論」 一九四六年一月号
- (45) 『母のない子と子のない母と』 壺井栄 光文社 一九五一年一月

Modern Culture in Saitama Prefecture (2)

Development of the Children's Literature, Sato Koroku and Tsuboi Sakae's Work

KONO, Motoki

近代埼玉の文化思潮を、その郷土的特質の一端を支える 文学、就中 児童文学 の史的展開から考察する。

- 1 【佐藤紅緑「あゝ玉杯に花うけて」】 浦和を舞台とする同作品は、文学史的には、大衆的児童文学論争を惹起し、派生しては、旧制中・高等学校および師範学校の学制の問題、大日本雄弁会講談社が生み出した大衆文化の問題、これらそれぞれの検討を要請する。

- 2 【壺井栄の埼玉を舞台とする文学作品】 栄の 埼玉もの の多くは、熊谷・鴻巣を作品舞台とする。戦中・戦後期の埼玉の社会世相を、文学の言説から検証する。

本稿は、 埼玉児童文学論 の学的確立とともに、埼玉文化の 未来像 を指定することを目的とする。なお本稿は、「埼玉学園大学紀要」 人間学部篇 第4号に掲載の、「埼玉の近代文化 児童文学における展開・石井桃子 」の続編に位置する。

キーワード：埼玉文化、児童文学、大衆文学、佐藤紅緑、壺井栄

Key words：Culture in Saitama Prefecture, Children's Literature, Popular Literature, Sato Koroku, Tsuboi Sakae